

## ユニットA 「教授・学習研究ユニット」 中間報告



拠点リーダー  
熊本大学大学院社会文化科学研究科  
教授システム学専攻長・教授  
鈴木 克明

<http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 1

## ユニットA 「教授・学習研究ユニット」

- ・ テーマ：  
教育イノベーションの基盤となる教授・学習システム開発
- ・ メンバー：  
主：鈴木、合田、根本  
副：中野、入口※1、都竹※2、戸田※2

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 2

## ユニットA「教授・学習研究ユニット」 研究成果のまとめ

- ・ 教育イノベーション基盤となる教授・学習システム開発では、①**実践に役立つ「実践研究」**を進めるとともに、②**よりよい教育を実践するための基盤となる理論や背景を整理した研究**、また、これらの研究をもとに、より革新的な試みとして③**イノベティブな学習・教授法に関する研究**を推進した。その成果を「国際的な研究拠点」としての役割を果たすために、④**世界へ発信**も積極的に行った。

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 3

## ユニットA「教授・学習研究ユニット」 ①実践に役立つ「実践研究」

- ・ Nemoto ほか(I-A-12)は、リフレクションを促すためのツールとして「ラーニングスケッチ」を提案し、それをオンライン大学院に導入することにより学生の振り返りを支援する方法を提案
- ・ Nemotoほか(I-A-22)は、オンライン大学院のカリキュラムにある「eラーニング実践演習」中に現実の開発課題を組み入れた成果を報告した論文(英文)
- ・ Nemoto & Suzuki(I-C-8)は、オンライン大学院オリエンテーションについての評価研究を国際会議報告

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 4

## ユニットA「教授・学習研究ユニット」 ①実践に役立つ「実践研究」

- ・ 合田ほか(I-A-10)は、科目密着型評価の実践でPDCAサイクルを実現した実践を報告した論文で、改善するための提案が評価
- ・ Godaほか(I-C-27)は、学習者支援の必要時期を予測する理論応用モデルの実装と開発を、またGodaほか(I-C-15)は協調学習環境における多様性支援の手法をそれぞれ国際会議で報告したもの

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 5

## ユニットA「教授・学習研究ユニット」 ①実践に役立つ「実践研究」

- ・ 高橋ほか(II-D-10:II-D-14)は本プロジェクトと熊本病院とのコラボレーションにより段階別のフィジカルアセスメント事例を用いた新人看護師教育にeラーニングを用いる試みの学会報告であり、今後の研究成果が期待される。

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻 6

② 基盤理論・背景を整理した研究



- ・ 鈴木・根本(I-A-14)は、教育設計についての最新の理論動向を解説した教育システム情報学会編集委員会からの依頼論文
- ・ 鈴木(I-A-2)は日本教育工学会論文誌の「大学教育の改善・FD特集号」に掲載された総説論文(招待)である。これまでの本プロジェクトにおける実績を踏まえて、教育設計学(ID)の知見をFDにいかすための提言を行った。

② 基盤理論・背景を整理した研究



- ・ 鈴木・根本(I-A-1)は、本プロジェクトでの実績を踏まえて、医療分野向けの総説論文として日本医療教授システム学会の論文誌に発表したもので、教育実践をデザイン研究論文にすることを推奨した。本領域での今後の研究アプローチを提案したものとして注目を集めている。
- ・ Suzuki & Nemoto(I-C-2)は、文科省科研費挑戦的萌芽研究の成果を国際会議で発表したもので、文化的・社会的要因を教育設計に取り入れる手法の研究動向を検討した。

② 基盤理論・背景を整理した研究



- ・ 合田(I-A-23)は、英語力分類の理論を比較し、リメディアル教育における実践の効率化を提案した。合田・山田(I-A-3)は、海外のeラーニングによる英語教育に用いられている学習理論を整理したもので、eラーニングの普及に役立つと評価された。

② 基盤理論・背景を整理した研究



- ・ Nakajimaほか(II-A-5)は、学習・教授法の分野で広く用いられてきた動機づけ理論(ARCSモデル)の拡張について詳細に検討して新たな実践的応用を模索した提案したもので、国際会議における発表(Nakajimaほか:II-C-12)を編集委員の推薦を受けて拡張して投稿し、採録されたものである。また、その後の研究成果を続報として国際会議で発表(Nakajimaほか:II-C-3)し、博士論文への発展を準備している。

③ イノベティブな学習・教授法に関する研究



- ・ 根本ら(I-A-11)は、教育設計理論(ストーリー型カリキュラム)をオンライン大学院に応用した国内初の事例において学習デザインの改善サイクルにより徐々に教育実践をレベルアップした研究成果を報告し、2012年度日本教育工学会論文賞(該当数1)を授与され、高く評価された。

③ イノベティブな学習・教授法に関する研究



- ・ ストーリー型カリキュラムについては、看護教育に応用した研究(Kitamuraほか:II-C-7、北村ほか:II-D-93)や学習システムの開発研究(高橋ほか:II-D-1)、ストーリー文脈を背景の違う学習者に合わせるためのアドオンの提案(竹岡ほか:II-D-12、II-D-34)、プロジェクトマネージャー育成に応用した実践研究(前田ほか:II-D-17、片野ほか:II-D-46)、文系大学での情報教育に応用した研究(朴ほか:II-A-9、II-D-76、II-D-94)など多くの研究アソシエートが取り組んでおり、今後さらなる研究成果の蓄積が期待できる。

ユニットA「教授・学習研究ユニット」  
③イノベティブな学習・教授法  
に関する研究



- Kato & Suzuki(II-A-4)は、学習・教授法の分野で今まで注目されてこなかったフロー理論を教育に応用するためのフレームワークを提案したもので、国際会議における発表(Kato & Suzuki:II-C-11)を編集委員の推薦を受けて拡張して投稿し、採録されたものである。また、その後の研究成果を続報として国際会議で発表(Kato & Suzuki:II-C-5)し、博士論文(2012年10月提出)の基幹成果となった。

ユニットA「教授・学習研究ユニット」  
④世界への研究成果の発信



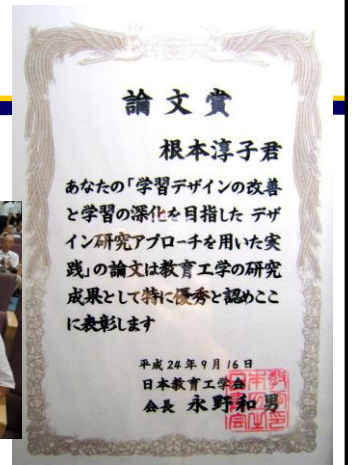
- 教育設計に関する日本における研究成果を海外へ発信したのものとしては、日本の大学における質保証の仕組みとオンライン大学院における実例を紹介したSuzuki(I-B-1)や、日本と韓国の教育設計研究と実践の特徴を報告したSuzuki & Insung(I-B-8)、教育システム学会の研究動向を国際会議で報告したSuzuki(I-C-17)、日本における教育設計理論(ARCSモデル)についての研究動向を国際会議で報告したSuzuki & Nemoto(I-C-22)などがある。

ユニットA「教授・学習研究ユニット」  
④世界への研究成果の発信



- 鈴木は国際標準策定団体(ibstpi)の理事として、2007年から教育設計関連専門職のコンピテンシーの策定作業にかかわってきた。その研究過程における調査結果を報告したものに鈴木(I-D-65)があり、研究成果を日本に報告して活用方法を提案したものに鈴木(I-D-17)がある。またオンライン学習者の成功要因としてのコンピテンシー策定の経緯について国際会議に報告した研究としてGrabowskiほか(I-C-11)がある。

研究が蓄積  
表彰(教員)



ユニットA「教授・学習研究ユニット」  
②基盤理論・背景を整理した研究



- Nakajimaほか(II-A-5)は、学習・教授法の分野で広く用いられてきた動機づけ理論(ARCSモデル)の拡張について詳細に検討して新たな実践的応用を模索した提案したもので、国際会議における発表(Nakajimaほか:II-C-12)を編集委員の推薦を受けて拡張して投稿し、採録されたものである。また、その後の研究成果を続報として国際会議で発表(Nakajimaほか:II-C-3)し、博士論文への発展を準備している。